伝えたい 平和のバトン
戦後80年 過去から未来
登戸研究所調査研究会のいま

あの時代 歴史を地域で共有

2 調査研究

月1回調査委 新たな発見も

「電気が、研究所が疎開先を決める条件の一つだったのでは。戦時中の電力事情を調べたい」「この地域の特徴を証明するためにも、全国とのしっかりとした比較が必要」

上伊那地方の有志でつくる登戸研究所調査研究会が、調査研究活動で聞き取り調査と並んで大切にしているのが調査研究。月1回開く調査委員会では、元大学院教授や大学名誉教授、自治体の博物館専門研究員らでつくる委員10人が、さまざまな研究テーマについて話し合う。

2018年の創設以来、史料や証言の分析、調査などを続ける。関係者が所持していた研究所の実験器具や、缶詰型爆弾の原料などを保管していた赤穂分工場に関する文書、研究所長が当時の赤穂郵便局長（現駒ケ根市）に充てた書簡なども発見。新たな証言も検証する。毎年夏には企画展を開き、研究成果を公表している。議論を交わすほか、駒ケ根市の中沢国民学校（現中沢小学校）や、爆弾の爆破実験跡、本部のあった宮田村の真慶寺など、関係箇所の現地調査も行っている。

今年力を入れているテーマは「電力」。高遠電灯や伊那電気鉄道、中沢村営電気事業など水力発電が盛んだった地域の電力事情に着目し、「研究所疎開の条件になったのでは」との仮説に基づいて議論を深めてきた。

調査研究はその内容を地域に広く知ってもらうことが大きな目的の一つ。電力との関わりについても、7月1日から駒ケ根市立博物館で開く夏の企画展で展示テーマの一つとして発表する予定だ。

地域の歴史を共有するため登戸研究所調査研究会が大切にする公開学習会。3月9日には地域内外から多くの人が集まった

公開学習会に 100人以上の住民

3月9日に駒ケ根市中沢公民館で開いた登戸研究所調査研究会の公開学習会。会場は100人以上の地域住民らで埋まった。「世話人の方たちに宣伝してもらったが、予想以上の反響。研究会の取り組みが浸透してきていると思う」。事務局長の松久芳樹さん(73)＝駒ケ根市東伊那＝は手応えを口にした。

報告会では、共同代表の小木曽伸一さん(76)＝同市飯坂＝らが史料や証言をもとに、中沢国民学校の第二工場門に位置付けとや、14歳だ科2年生42人の4月から8爆弾製造に従と、さらには現ら高齢者まで「国民戦闘義されようどを説明した。

小木曽さんは疎開してきて、も動員して爆者が出征し、とは事実。ただをやめられない子どもたちも従事していはどうつくられ解するには当時や、それまでので共有することやこれからを考事象として、研いきたい」と話